



手記集を介したコミュニティ : 「阪神大震災を記録しつづける会」の活動変遷

高森, 順子

(Citation)

歴史文化をめぐる地域連携協議会予稿集, 10:17-25

(Issue Date)

2012-01-29

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003759>



	タイトル	出版元	原稿締切日	発行日	ページ数	応募数	掲載数
第1集	阪神大震災 被災した私たちの記録	朝日ソノラマ	1995年3月15日	1995年5月30日	293	240	73
第2集	阪神大震災 もう一年、まだ一年	神戸新聞総合出版センター	1995年10月31日	1996年4月1日	269	229	68
第3集	まだ遠い春 阪神大震災3年目の報告	神戸新聞総合出版センター	1996年10月31日	1997年6月30日	297	185	54
第4集	今、まだ、やっと・・・ 阪神大震災それぞれの4年目	神戸新聞総合出版センター	1997年10月31日	1998年6月15日	198	134	52
第5集	阪神大震災 私たちが語る5年目	神戸新聞総合出版センター	1999年1月31日	1999年7月30日	269	120	61
第6集	阪神大震災 2000日の記録	神戸新聞総合出版センター	2000年1月31日	2000年8月10日	238	82	40
第7集	阪神大震災 7年目の真実	阪神大震災を記録しつづける会	2001年1月31日	2001年6月30日	111	36	18
第8集	阪神大震災8年目 記憶の風化と浄化	阪神大震災を記録しつづける会	2002年1月31日	2002年9月30日	29	14	8
第9集	阪神大震災体験手記 第9巻 記録と記憶	阪神大震災を記録しつづける会	2003年1月31日	2003年9月30日	62	36	15
第10集	阪神大震災から10年 未来の被災者へのメッセージ	神戸新聞総合出版センター	2004年9月30日	2005年1月17日	262	58	44

阪神大震災を記録しつづける会の手記集表題・出版元・締切日・発行日・ページ数・手記応募数・手記掲載数

そうして、四カ月間の避難所生活が始まった。生活環境が全く違う人々の集団生活がスムーズに行われるわけがない。当番を決めて食事を取りに行くのも、問題が出てくる。毎日、明日が本当に来るのか不安だった。この先一体どうなるのか？ 心配ばかりで眠れない日が続き、途方に暮れた。

お金の問題、家の問題、両親や自分自身の今後の問題、当面の健康の問題、何から片づけていかななくてはいけないかわからない。当たり前だった事が当たり前ではなくなる。今まで築き上げてきた、小さな平凡な幸福をたった数分で失った悲しみ。いろいろな思いで押しつぶされそうになった。でも自分がしつかりして、両親を助けていかななくてはと思い頑張った。

きっと、みなそうだったと思う。九カ月たった今もみな必死で頑張っている。愛する人との別れがありながらも、みな頑張っている。仮設住宅に入った人も、まだ入れない人も、みな必死で生きている。

私の父も避難生活の中で身体を壊した。見えていた方の目が見えなくなった。六十日間の入院の間、二回の大手術。回復は四分六だと言われた。全く見えなくなる確率が高いのだった。母と私は地獄の底に叩き付けられた気分であった。この世にやはり神様はいないのであろうか？ 毎日そう思いながら会社と病院と避難所と家の片づけ、解体等の出口のない迷路をぐるぐる回っていた。

ほんとにしんどかった。もし父の目が見えなくなったら、私が父の目になってあげよう。何もいらない、ただ父の目が回復するようにとばかり毎日祈っていた。

あれから九カ月たった。幸いにも父の目は見えるようになり、私はIKの仮設で一人で生活して

いる。この九カ月間、私はものすごい体験をしてきたように思う。今まで自分一人で生きてきたと思っていたけれど、実は周りの人や物に生かされてきたんだと気づいた。そして何が本当に大切で何が必要でないのかも初めて知った気がする。

この地震で大勢の人達が身体も心も傷ついた。周りは復興、復興と言ひ、少しずつ新しい建物が建ち始めた。急ピッチで新築の家があちこちに見られるようになった。

もとの神戸に戻すことも大専だけれど、傷ついた心はそう急ピッチに戻らない。ゆつくりあせらず、いやしていけばいいと思う。ゆつくり自分のペースで「生きる心」を復興させていきたい。

夜は必ずあけ、朝は必ずくる。希望を失わず、誰かのために生きていたい。そして誰かの大切な人間に私はなりたい。一人でも多くの人の……。

失われた右手 近田 育美

二十七歳 会社員 神戸市垂水区

私の従兄弟は、右手を失いました。一般的に言われる労働災害事故です。労働災害事故のことを、なぜ、阪神大震災の体験記に記すのかと言われそうですが、私はこの労働災害事故が、地震が起こってなければ、なかったと思うからです。

大地震により、多くの家屋、会社、ビル、工場が壊れ、多くの人々の命が失われました。たしかに、このことは一番、大きな悲しみです。しかし、半年以上過ぎた今、少しずつ落ち着きを取り戻

しつとあります。もちろん、以前の生活とは変わってしまいましたが……。

従兄弟は、阪神大震災により同業者の建物が多数、営業不能な状態となり、大変忙しい日々を過ごすことになりました。毎晩の残業に加えて、土曜日、日曜日の出勤。このような状態が、今年の二月頃から、ずっと続いていたそうです。

私の目から見ても、人一倍、責任感が強く、真面目な従兄弟は、文句も言わず、このような日々を半年以上も続けていたそうです。震災前であれば、このような苛酷な労働条件はありえないだろうし、世間も許してはいないと思います。しかし、神戸の街を復旧させるためには、お互いの努力と助け合いが必要です。壊れた工場の製造分が、他の工場へ廻ったり、壊れた営業所が他の場所へ移転する等の今までにはなかつたしわ寄せがあるのです。

従兄弟は、半年以上にわたる毎日の疲労がピークに達したとき、右手を機械に巻き込まれてしまいました。やはり、疲労のため、動作が緩慢になってしまったらしいのです。人間には、「自分だけは、大丈夫だろう」と言う自己過信があります。もちろん従兄弟にも、その過信がありました。しかし、事故が起こってからでは、事故を悔やんでも遅いのです。

利き腕である右手を失ってしまった従兄弟は、今はまだ病院で入院生活を送っていますが、本当の苦労は、退院してから後の社会へ復帰してからだと思います。利き腕を右から左へ変えなければなりません。文字も左手で書かなければならないし、何をするのも左手だけでしなければなりません。

私は、自分自身のことではありませんが、従兄弟が右手を失ったことを聞いたとき、血がすーっと引いていくのが自分でもわかりました。次の瞬間、従兄弟のこれから先のことを考えると、自分のことのように、気分が落ち込んでいきました。二、三日間、寝つきが悪くなってしまいました。

「どうしてこんなことに……」と思いながら数日間を過ごしていたのですが、従兄弟の仕事のことを聞いて、これも阪神大震災の影響だと思えてきたのです。あの一月十七日の地震さえなければ、従兄弟は、苛酷な仕事を強いられることもなく、責任から出勤することもなかつたでしょう。あの震災さえなければ、疲労からくる動作の緩慢も起こらなかつたでしょう。この従兄弟の事故を、ただの労働災害事故として片付けたくないのです。

阪神大震災により、ニュースにならない被害が多数あると思います。多くの人々が、今もなお、目には見えない危険にさらされているような気がします。私の思い過ごしかも知れませんが、多くの人々は、疲労しています。少しずつ以前の生活に戻るでしょうが、私は絶対に阪神大震災を忘れないようにしたいのです。

従兄弟のように二次災害に遭われる人々がいないように祈ると共に、これから従兄弟のリハビリに少しでも役立ちたいと思います。また従兄弟だけでなく、困っている人々の力に、少しでもお手伝いができるように、自分自身を今よりも強く、人間性を向上させていこうと考えています。

今のままでは、まだまだ道のりは遠いですが、まずは、従兄弟のこれからのことを一緒に考え、手伝い、心の傷を少しでも軽くできるように頑張っていこうと考えています。

不平等な幸 (ちち)

岡部 真記 (十九歳 大学生 横浜市)

50

一九九五年一月十七日から五年間、何度原稿用紙に向かっただろう。この気持ちを風化させてはなるまいと、記録に残さねばならないと、何度鉛筆を握っただろう。けれどそれらは全て未完成に終わった。書けば書く程、嘘になる。伝えようとするほどはたはた伝わらないうちがしてくる。

一足になるといつも鬱鬱になっていた。私は今生きているのに、何もしてないのではないかと。「生きている」といつの日に、「生」に対し何も合えねばならないという脅迫に近いほどの意識が襲いかかってくるのだ。

阪神大震災を経験したのは中学二年の時だ。西区に住んでいた。ドクドクという地響き、崩れ落ちる本の音、カラスの割れる音、寝ているベッドが揺りのジェットコースターのようにたてるカタカタとした音……。私の五時四十六分の記憶。ほとんどは音である。しかし、音も揺れもその記憶はもう薄れている。私が震災を思い出そうと一番目に浮かぶ光景は、べつべつ窓から見た赤い空だ。煙がもくもくと上がり薄い赤色の空が私の目の中に焼き付いている。それと同時に浮かぶのは通学途中に見た、燃え尽きた街。真っ黒に燃えた鉄筋コンクリートの骨組みと、そして妙に方々とした広い灰色の空間。コースで流れる、燃える長田付近の街には、自分が見たべつべつ窓からの空と、黒い鉄筋コンクリートが重なりあつた。うしろの画像と、私の記憶。いくつもの断片的な

シーンがつながり重なるその度に、背筋がゾクゾクする。炎があがり、もくもくと流れる煙の下にあの街があることを知っている。大勢の人が立ちすくみ、花を供え、手を合わせていたことを思い出す。

「死の側から見る生の世界」という言葉が、たしか大衆人語に載っていた。死んでいることが普通で、生きているといつことが異常な世界のことだ。何もないことが普通で、何かあるといつことが異常な場所のことだ。今まで普通だと思っていた「現実」はまるで滑稽な劇のようには思えた。震災後に初めて見たコンクリートは車の宣伝だった。赤いスポーツカーが広い道路を風を切つてそこそこ走る。あまりに「非常識」過ぎて唾然とした。もちろんどうして今、このよつな状況にこの流すのかといつ怒りもあつた。しかしそれ以上に「車を買つた」といふ自分が全く意味のないことだつた。例えば化粧をすることも、ハイヒールの靴をはくといつことも、街にネオウが舞くといつことも全て、全く無意味な話だつた。

五年間幾度となく「尊い命が失われた」といふ言葉を聞いた。確かに命は尊い、多分正しい。けれど、まるで選挙時の当選票数のように増え続ける死者の数を見てどれほどの人がその命の数を実感できただろう。今生きているといふ命の重さを感ずるとはいつのいつのことなのだろうか。「生きる」とは偶然に過ぎないのではないかと。私は震災の直後勝手語つたよつに笑つた。生きているといつことを単純にすつと思つたのだ。死んでいる人が大勢いるかもしれないといつことをよそに、私は自分が幸運にも生きている、なぜか分からないが生きている、生かされている、それだけで嬉しく

51

て仕方がなかった。因果の報ではない「生」と「命」を私たちに与えてくれたらよいのだと思う。「尊い命」とは何だろうか。何だったのだろうか。

今、東京で大学に通っている。震災は頭の片隅にしかない。けれど眠る前、ベッドの上で時々思う。「もし、今地震がきたらどうなるのだろうか。」少し大きな地震があった時友達から電話がかかった。「今の揺れ、ちよつと大きかったな。震災思い出すな」

家族も友達も死ななかった。「神に出身なの？ 震災に遭ったの？ 被害はあったの？」そんな聞く人の中には、私が「みんな無事だったよ、大変だったけど」と言つと少しがっかりしたものは顔をみる人が時々いる。その度に私は自分が伝えたいのはそんなことではないと思ひ、けれどまた伝えきれぬ自信がなく口をつぐむ。辛い人や苦しんでいる人は神にはまだ大勢いる。けれど自分より辛い人はもつといるのだからと語るのをためらつて必要はないはずだ。そんな思っているのび、うまく言えないことが多い。

今私が感じるほど、感謝する気持ち、いろいろなことがあの日から始まっている。幸せだと感じる時、欲しいものが手に入った時、それが本物がどうか確かめようとする。形あるものはみな壊れてしまふ。本物のもの、目に見えないもの、そついつのものしか残らないから無意識に探している気がする。

手を合わせて祈る。震災の日がくる度私の中の止めどなく「思い」が溢れ、何かが始まる。神が世を創つたならば、その真理を一度じっくりから見てみたい。世の中のからくりを見てみたい。平等

に配分されない幸と不幸のわけを知りたい、そんなことを考える。

トコロ

七野 美佐子 (四十一歳 主婦 宮城県岩沼市)

私が地震に遭遇したのは、兵庫県の三田市という所です。私にとっては生まれて初めてのすさまじい揺れでしたが、それでも、家具は倒れる事もなく、食器棚の中身がこぼれ落ちた程度でした。

私と主人は和室で、二人の娘はとなりの部屋の二段ベッドで寝ていました。とつと子供達の事が気になりましたが、聊すかしい話ですが、恐怖で身動きできず、頭まですつぽりとふとんの中にもぐり込んだまま、主人に「子供がー。子供がー」と叫んでいました。足元がふらつ中、主人がとなりの部屋へ行き、寝ぼけまなこの子供達を一人ずつ和室へ連れて来てくれました。

それから四人で、ふとんの中にもぐり込んで、完全に揺れが収まるまで様子をつかかっていたのですが、実際には揺れていないのに、いつまでもからだが揺れているように思いました。

あの震災では、かけがえのない命を落とされた方や、大怪我をなされた方が大勢いらつしゃいますが、運よく怪我はしてなくても、心の傷を受けた方は数え切れないほどいるのではないのでしょうか。

の強みでもあろうか。貧しさに近付くと人としての生き方が見えてくる。

小さくても古くても我家に住めたことにただただ、感謝している。多くの人に支えていただいたことを一生忘れず、弱い立場に苦しんでいる人の代わりに少しでもなれたら、と思いつけて今日も行動をしていきたいと思う。被災者に真の幸せが訪れることを願ってやまない。

二人の孫へ

岡本 博子（六十一歳 神戸市東灘区）②

木犀の薫りが澄みきった青空にとけ込んで行くようです。そちらにも届きましたか。二人とも元気ですか。久しぶりにお手紙を書きました。

今日は小学校の運動会です。新しい体育館が完成し、裕寛君も六年生になり最後の徒競走に日焼けした顔で誇らしげに張り切っている姿を想像しています。彩ちゃんは二年生、すうりとした足も伸びてきてどことなくお姉さんになった感じ、はにかみながら踊っていることでしょう。

夏休みに来てくれたお友達を見て驚きました。広くしつかりした肩幅、太く低い声、あれからもう千日ぐらいい会っていないものね。何から話してよいかわかりません。驚くようなビッグニュースばかりです。更地に家が次々と建ち始め、遠くから来た人は目印がなく方向がわからず困ったそうです。

瓦の屋根も扉もなく、モデルハウスの展示場みたいとかセキスイ村などと言われ、そこに住む人も変わりました。もしかしたら新しいお友達ができたかもしれません。お祭りも復活し、春、秋と二度もダンジリがすぐ近くで見られるようになり、思わず、窓をいつばいに開け二人の写真をそこに立てました。彩ちゃんがまだ小さかったころお母さんと行列に参加しておにぎりをいただいて大喜びしたことを思い出します。

でも何と言っても一番のニュースは、森公園の東にJRの駅「甲南山手」が昨年の十月に新設されたことでしょう。コンビニもでき二人ともアイスクリーム、ジュースと楽しみに出入りしたことでしょうね。一度皆でこの駅から動物園にも行きたかったね。家から三分のところだもの、とても便利になりました。

でももちろん良いことばかりではありません。駅のために区画整理事業の話が持ち上がったと言っている人もいます。今では意見の相違から人間関係もこわされ気まずい日々を送っている人もいます。

ようやく家族全員揃って生活し始めました。以前の家に比べてとても狭くコンパクトな建物です。あなたたちがいたら無理をしてもう一つ勉強部屋を作ったと思います。残り少ない作品の中から小さな絵を飾り、裕君はこの場所、彩ちゃんはここと、皆でテレビに近い場所を指さし、涙声になってしまいました。

仏壇もおさまり、毎日好きだったパンも沢山お供えできるようになりました。でもいくらお供えしても少しも食べてくれず、ただ写真がほほえんでいるだけ。一体何をしてあげたら喜んでくれる

のかしらと悩みました。

それは震災直後から思い続けていたことです。遠くは京都の端まで、おじいちゃんと探し尋ねて歩き、ちょうどお彼岸の中日にお内仏にお地藏様をお迎えすることができました。この世からあなたたちの所へ無事に旅立てるよう道案内をしてくださるそうです。

寂しくなったり困ったことが起きたりしたときは、お父さんお母さんの代わりに相談に乗ってくださると思います。たんなる自己満足と言われそうですが、それを信じて毎日お願いしています。宇宙は円く続いていて道一つで区切られているだけだとも聞きました。いつでもあなたたちに会えるのだと自分をなくさめています。今度会ったときはいっぱい遊んでホットケーキにバターとシロップ沢山つけようね。

お父さんお母さんは相変わらず忙しく、まだ更地のままの庭と塀の修復のことで頭を痛めています。図面と向かい合つてときには、食事も忘れるほど机に座ったままです。何十年もかけて築き上げた努力と建物、それに生きるための心の支えであったあなたたち二人までも失った今、また一から一歩ずつ出発しなければなりません。

あの地震さえなかったら、今ごろは親子四人で秋の野山にリュックを背負ってどんなに楽しかっただろうと、八年間と四年間の大切な思い出が走馬灯のように頭を駆けめぐり、無念さと申し訳なさで涙が止まらず、体が震えてきます。

最後にお願ひがあるの。お父さんお母さんに今までと同じようにパワーとエネルギーを送り続け

てあげてください。いつの日か、「生きていて良かった」と思わせてあげたいのです。人の悲しみ人の親切を理解しあえる人になり、前向きに歩いて欲しいのです。

夕日が西の空にかけりはじめました。コンテナの屋根まで登った朝顔がまだブルーの色のままで一杯花をつけています。可愛い向日葵、塀代わりの秋桜、みな元気よく一緒に咲きそろっています。壁とアスマだった所なのです。

裕君、寒くなるからジュースを飲み過ぎておなかこわさないようにね。少し勉強もしなくてはね。

彩ちゃん、風邪ですぐ鼻をつまらせ寝苦しくなるから気をつけてね。

おじいちゃんとおばあちゃんは、もう少しこちらで手伝うからね。愛子おばあちゃん、お友達にもよろしく伝えてね。今日はこれくらいにしておきます。ふと気がつくと足元を晩秋の風が流れて去って行きました。

尾張の国から

西田 公夫（七十二歳、りんりん愛知代表 愛知県）◎

未曾有といわれた激震にすべてを奪われ、身一つで助け出された私は避難所生活で体調を崩し、頼みの仮設住宅も抽選にことごとく外れ、断腸の思いで神戸を後にしました。

慣れぬ土地で話相手もなく、先行きの指針も定まらぬまま無為に日を送らねばならぬことは、想

まわりの間に寝ていた。

数日後、新生児室まで行く練習をした。島子に早く会いたいと思ったのは本当だが、私を揺かかしているものが他にもあることも感じていた。ベッドに十二人並んだ赤ちゃんを見ると、ほとんどの子が予定日より早く、三千グラム以下で生まれてきた。地震のせいだろうか。

母乳も充分出て、三田も買つことはなかったと思いながら十一日後退院した。

そして今年の秋、お宮参りの時とはずっかり交わった中山寺で、兄のスーツを着た次男と夫が手を握り、以前はなかったエスカレーターに乗っていた。反対の手に千歳鉛を持って。

娘への手紙

山中 隆太 (三十九歳 コンサルタント 東灘区)

あの頃はまだ四歳になったばかりだったね。ベッドの半分を覆った本棚が目に入った時、お父さんの息は一瞬止まりそだった。そしてかけより体中ををすくって怪我がないか、夢中で確かめたんだよ。「助かったから、運がよかったでは済まされぬ」という気持ちには死者の数が増えるにつれ、どんどん大きくなっていました。

ほんの数センチの違い、ほんの数秒の差が幾千もの生死をもてあそび、生かされた側にいる自分

運の存在の意味を考えずにはいられなかった。今日死ななから明日も元気になることという延長線上の生き方はできなくなった。健康でいても、良い行ないをしていても、それは寿命とは関係ないのだと思うようになった。今日を生きたことという思い、今日を生きている喜びはあの日に芽生えたものな気がします。

まことおごんな大きな地震は少なくとも君が生きている間は神代にはないと思う。それよりも事故や病気の方がすくこと恐ろしい。以前はそんなことなかったのに、お父さんは地震がきっかけで死というものを、ものすごく身近に感じるものになりました。

それは四年たった今も変わらず、明日も元気に目覚めて欲しいと君の寝顔に毎晩のよう祈ります。手を握らなければ安心して眠れないお父さんの癖はいつになったら直るところだね。

この間久しぶりに地震直後の写真を見たね。大阪のおばあちゃんの家にはらくお世話になっていたとまじお片付けに帰っていた時のことまでです。神代に何かあったが、地震がどれほど恐ろしいものなのかを覚えていてはじめて、手を引いて瓦礫の中を歩きました。

小さかったからほとんど覚えていなかったけれど、今はたっ焼き屋さんが建っている場所を若い男の人が亡くなったことや、本山第二小学校にたくさんの子供たちがあつて家をなくした人達が暮らしていたことを興味深く聞いていたね。

君の記憶のなかに覚えていたものが少し蘇ったような感じがしました。写真を見たおかげで忘れかけていた部分に新たに記憶の刷り込みができたようです。いついつかを繰り返すうちに、君

が大きくなった時に小さな頃の地震の体験を誰かに話せるよこになれば嬉しく思います。語り継ぐことが、貴重な体験をした私達の義務だと思つてからです。

もこのあたりでは地震の話はほとんどしなくなつたし、日常の会話にふさわしい題材ではなくなりつつあります。世の中のどんな出来事も人が興味を持つのはほんの短い間です。でも震災を風化させないためにいろんな人が多くの努力をしていることも忘れていてほしいと思います。

君が小学校に入学してからもろもろな行事がありました。アソビの講堂で入学式をして、その年の秋までは運動場の真ん中に建てられた仮設の校舎で授業を受けましたね。だからしばらくの間は走りまわる場所がなかつたのでつらかつたと思います。はじめての運動会は近くの中学校を借りて行なわれました。そして十一月新校舎が完成し、みんなで引っ越したね。それまで使っていた仮設校舎はあつたつと間に取り壊されました。

「中に入ると、なんかすごくきれいですごくひろかつたです。だいじかんはきれいで、花蕊はひつくりしました。校舎がこんなにきれいだと思いませんでした。楽しそつでした」

新校舎についてのその頃の作文です。希望をいっぱいにふくらませ、できたての校舎を探険した様子がよくわかります。そして平成十年四月に運動場も完成し、また子供達の賑やかな声が戻ってきました。すべてが新しくなつたけれど、震災前と大きく違つたことが一つあります。運動場の一角にロウハウス風の震災資料館ができたことです。

ちよつと四年を迎える頃、二年二組全員でそのロウハウスに行き、先生のお話やその時の様子を

聞かせてくれたね。地震が起きた時刻をそのまま止まつた時計、高速道路やアソビの講堂が崩れた写真、そして亡くなつた四人の生徒の写真。いつまでも忘れないように、神戸で起こつた悲しい出来事を心に刻むためにロウハウスは建てられました。これから入学してくる子供達は地震を知らない世代ですが、それでも毎年こつと語り継がれていくのだと思います。お父さんはとても大切なことだと思つたね。

また地震のことを話さつたね、地震を知らない弟にも話してあげよつたね。

この間お風呂で歌つてくれた「しあわせ運べるよこに」という歌にとつとも感動しました。最近の朝会でよく歌つらしく、聞せてもらつたけりうしはほろほろでした。この詩にあるよこに毎日を大切に生きていこつたね。

すつとこの町で暮らしていきたいね。

私の十大ニュース

匿名・女性（二十八歳 無職 栃木県那須郡）

毎年、年末に報道される「今年の十大ニュース」を見ても、自分には関係のないことと客観的にとらえていた。しかし、四年前の震災を体験してから、いつ自分の身に降りかかってくるかも分か